

同和問題（道徳）学習指導案

平成3年2月14日（木） 第5校時

板野中学校

2年B組 男子19名，女子18名，計37名

指導者 天 狗 石 み ゆ き

1. 主 題 人として生きる
(資料「てのひらのぬくもり」わたしの願い)

2. 主題設定の理由

2年生に進級してまだ2ヶ月で無邪気な1年生の表情を残すこのクラスの生徒たちと6月に初めて顔を合わせてからはや8ヶ月余りが過ぎた。生徒たちは日常生活や学校行事、また同和問題学習を通して拙いながらも自分自身を見つめ人としてのあり方を考えそして集団の中で互いに支え合い助け合いながら仲間とともに問題を解決しようとする姿勢を培っていくことの大切さを学んできた。ことに学年全体をあげて体育館で行ってきた学習はクラスという狭い枠にとらわれない意見交換ができた。最初はその形式や雰囲気戸惑い本音を言えずにいた生徒たちにも熱気あふれる仲間の発言に刺激され導かれて徐々に発言できるようになった。そうした発言からは差別に対する意識も随分磨かれてきたことが伺われる。

しかしながら差別の現実には根強い。生徒たちはこれまでの同和問題学習から「差別をすることは人として最も醜い生き方である。」ことを気持ちの上では理解しているように見受けられる。もちろん同和問題学習を通して差別の不当性を明らかにし人としての生き方を考えることは心理的な面で差別解消の意欲を喚起するため不可欠である。学習の過程でいろいろな人の生きざまにふれ深い感動を受け個々の生徒の口から出た言葉は決して嘘ではなく真剣に考えた結果であろう。しかしながらその考えを現実に行きとして表すことになると躊躇する生徒も少なくない。年々過熱化する受験戦争をはじめ非人間的な現代の風潮にあおられてか、学級あるいは学校や社会など様々の集団の中で生活しているにもかかわらず自分本位で利己的な考えを持つ生徒も少なくない。中には相手を思いやれないどころか自分の放った言葉や態度が相手を傷付けていることさえ気付かないほど人権感覚が麻痺している例も全くないとは言えない。授業中においても周囲の迷惑をかえりみず自分勝手に騒ぐ生徒がいる。平気で暴言を吐く。しかしながら道徳の授業においては心を打つ発言をする。その度この心と行動に垣間見られる矛盾はどうして生じるのだろうかと考えさせられるのである。さらにはそれを見てみぬふりをする生徒あるいは注意したいのにできない生徒の存在が気がかりでならない。矛盾や憤りそして怒りを感じながらも仕方がないと諦めてしまったり差別を含めて問題に立ち向かう意欲に欠けひたすら事なかれ主義を貫こうと誤った方向に努力する姿勢も見受けられる。心に反して差別を許すことは人間の真理に基づき自由に生きるという自分自身の人権をも侵すことになる。差別はまた次の差別を生む。心に潜む差別意識を立たねば被差別者の苦しみは繰り返される。学校行事等においては学級集団として活気もあり団結力も素晴らしいクラスである。それゆえ身近に

あるこの矛盾が差別を温存することになりはしないかと不安に思われる。従って身近な差別を敏感に感じとりそれに対して自主的且つ積極的に立ち向かう姿勢を育てることがひいては部落差別の解消にもつながるのではないかと思われる。なくそうとすることと行動が伴わなければどんな差別も根絶されない。相手の立場に立って痛みや苦しみそして怒りを自分のこととして感じられてこそ真に人を思いやることができ、また人権と真理を追究し自主的且つ積極的に差別に立ち向かう意欲につながる。部落差別を含めて私達の周囲には様々な差別が存在する。そうした身の回りの差別に気付き、それに対して強い憤りと怒りを持ちいつどんな状況にあっても変わらない公正な判断力と差別解消に向けての行動力を支える真理が個々の生徒に培われることが今後より一層望まれる。

本資料「てのひらのぬくもり」は、筆者（私）が身障者と出会い身体にハンディを持ちながらも老人に席を譲るという行為を目の当たりにして無関心を装う周囲の人々や表面的な容姿（イメージ）に惑わされた自分の愚かさに気付き真の思いやりとはどういうことなのか、人として生きるということについて考えを新たにする過程が描かれている。人権疎外という厳しい現実にもさらされてもそれに臆することなく前向きに生きようとする姿勢に人権確立の意味と必要性を学び障害をものともせず「人としての思いやりの温かい心」を失わない姿に人としての生き方強さを改めて感じ取らせた。また、筆者（私）の心情を変化させたものについて生徒自身の体験と照らし合わせて深く考え理解することで自分の中の差別心をも問い直し、生徒個々が実感を伴いながら人としての生き方そして自分自身のあり方を見つめ差別解消に向けての意欲を喚起して欲しいという願いを込めてこの主題を設定した。

3. ね ら い

人の心の中に潜在する差別心（偏見）が、様々な差別を生み人権疎外につながることに気付かせる とともに、表面的な同情でなく相手の立場に立って真に思いやることの大切さを理解させる。さらに、厳しい「身障者」の現実に関心し人間として望ましい生き方を一人ひとりに考えさせ、それを現実にする意欲を喚起させる。

4. 視 点

人権と差別

5. 指導計画

（1）常時指導

朝の学級会活動、帰りの学級会活動を中心に据えた全ての教育活動の中で人間の生き方や生きることの意味を追求する営みを大切にし、毎日の生活ノートの営みを核として日々人間の生き方を語り合い、学級目標である「美しさを求めて生きる人生」を合い言葉に共感と連帯の絆に支えられた学級集団をつくる。

- (2) 関連的指導 特活『理想に向かって進もう』----- 1 時間
2 年生も後半を迎えたこの時期に自己の成長の後をふり
返り、その成長の度合いを自覚し、さらによりよい成長を
目指そうとする意欲と態度を育てる。
- (3) 核心的指導 道徳『人間に光あれ』----- 3 時間
全ての人間の自由と平等を勝ちとるために、どんな厳し
い状況の中でも決してくじけることのなかった部落の人々
の誇りうる生きざまに共感させ、その光や抵抗のエネルギ
ーを自分のものとさせる。
- (4) 発展としての関連 道徳『てのひらのぬくもり』----- 1 時間 (本時)
厳しい身障者差別の現実の中にあっても前向きに生きる
姿勢に学び、表面的な同情を越え真に相手を思いやること
の大切さや人としての生き方を考えていく中で、これまで
の同和問題学習で培ってきた差別解消に向けての意識をさ
らにしっかりしたものにする。
- (5) 常時指導 (発展) 仲間の幸せの中に自らの幸せを見だし、仲間の悲しみを
みんなで幸せに変えていこうとする共感と連帯の絆を土
台とし、人間を大切にする、人間を尊敬する教育をよりい
っそう推進していく。部落差別の悲しみは人間の悲しみな
んだという視点に立ち、家庭・地域社会において部落差別
解消に取り組む態度と一切の差別を許さない生き方を全て
の生徒の中に育てる教育を実践していく。

6. 本時の指導

(1) 目 標

身障者をとりまく人々の態度から人権疎外の実態と人の心の中に潜む差別心に
気付かせるとともに、身体に障害をもちながらも決して臆することなく人を思い
やる心を実際に行動として表そうとした身障者の勇気あふれる前向きな生き方に
学び、私の心情の変化を通して同情ではなく真に相手を思いやることの大切さや
差別解消に向けて人としてどうあるべきか生徒自身の生き方と呼応して考えさせ
る。

(2) 展 開

学 習 活 動	主な発問と期待する生徒の反応	指 導 上 の 留 意 点
① 困っている身障者 を前に周囲の人々が	○落とした本がどうしても拾え なくて困っている身障者を前に	●周囲の人々の「手をか すでもなく」「珍しそう

とった態度について考える。

②私のとった行動とその時の心情を考える。

③車内で席を譲る身障者を見た私の気持ちの変化と人としての生き方について考える。

して周囲の人々が取った態度の背後にはどんな気持ちが潜んでいるのか。

- 自分には関係ないことだ。
- かわいそうだとは思うけれど誰かが手をかすだろう。
- 一人で弟歩かなければいいのにという気持ち。
- 自分とは別の世界で生きている人間だと思っている。

○私はどのような気持ちで身障者に関わったのか。

- 一生懸命な身障者を見て気の毒に思ったから。
- 誰にも助けてもらえずにかわいそうだという同情の気持ち
- 助けるのが人間として当然だと思って勇気をだした。
- 手をかさずに通り過ぎる人々を見て憤りを感じたから。

○握手を求められたとき私はなぜ戸惑ったのか。

- 差し出された手の指が異様に曲がりくねっていて触れるのが恐ろしくなったから。
- 自分とは違う人間のように思われたから。
- 自分が周囲から孤立してしまうような不安がよぎったから

○車内で席を譲る身障者を見て、最初であった時の「恐ろしく異様な何とも言えない」私の気持ちはどうして変わっていったのか。

にふり振り返りながら」通り過ぎるといった利己的な行為は、とりもなおさず人権を無視した行為であることに気付かせる。
●またその行為の裏には障害者を劣等視する気持ちや自分とは別の種類の人間であるといった差別心が存在することにふれて問題意識を持たせる。

●私が表面的な同情と真の思いやりを混同している点を鋭く感じとらせる

●容姿など表面的なものから受けるイメージに左右される人間の心理的な弱さを認めながらも、果たしてそれでよいのかと生徒自身が真理に問いかけられるよう促す。

●真に人を思いやる心に触れて無関心を装った周囲の人々の愚かさ弱さに気付いた私に共感させ、同情でなく真に相手をも

④ どうすることが差別解消につながるのか考える。

- 身体に障害をもちながらもそれに負けずに前向きに生きようとする姿に感動したから。
- 自分に自信をもって行動している障害者を見て表面的なことにこだわった自分の愚かさに気付いた。
- 人間の本当の価値は外見ではないことに気付いたから。
- 身体に障害はあっても同じ人間であることにかわりないことに気付いたから。
- 身障者の温かい心にふれて自分の中のわだかまりがとけたから。

(補助発問)

○ 老人に席を譲った身障者の行為や生き方についてどう思うか

○ 身障者とふれ合った体験(交流学习など)から学んだことや感じたことについて。

○ この資料(変わっていった私の気持ち)を通して差別解消のためにどのような取り組みが必要と思うか。

- 本当に正しいことを見極めて行動する。
- 表面的な同情でなく真に相手の立場に立って考える。
- 互いの苦しみや痛みを分かち合って支え合って差別に立ち向かいたい。
- 自分の中の差別心から改めていく。
- 身の回りの差別を見逃さず自分から積極的に差別に立ち向かう。

いやる気持ちが必要であることに気付かせる。

● 厳しい身障者差別の現実にはさらされながらも「人を思いやる気持ち」を失わず実際に態度で表そうとした本当に美しい生き方に気付かせる。

● 障害を克服して自らの手で自らの生活あるいは人権を確立しようと前向きに力強く生きる姿勢に共感させ、それが差別解消の手立てともなることを理解させる。

● 私の心情の変化や身障者の生き方を自分自身とかわらせて、共に生き共に学ぶ姿勢が必要であることを実感させる。

● 相手の立場に立って思いやり、その痛みに対して共感的態度がとれるように促す。

● 被差別者の気持ちを自分から理解しようとし、差別の現実に対して人としての真理に基づき正しい判断と行動が差別解消につながることを理解させ、今後の取り組みを生徒個々の中に確立させる。

【授業記録】

T : 皆さんは2年生になってからこれまでにいろいろな資料を通して学年全体で差別について考えてきました。今も様々な差別問題があります。部落問題や、そして今日とりあげる資料では身体障害者差別などもそのひとつですね。この資料の内容もさることながら、これから皆さんが生きていく中でさらに多くの差別に直面した時にどんなふうに対応していったらよいか自分の中で確かな考え方をもって欲しいと思う。そのことを今回はこの資料を使って考えていって欲しいと思います。みんなは2Bというクラスで一年間過ごしてきてお互いにいろんな面を見てきたと思う。けれどももっともっと信頼を深めて、苦しいときこそ支え合えるように自分の思いを皆にぶつけ、またその友達の一言一言を大切に受けとめてそれに対して自分の意見を返していって欲しい。その話し合いの中に今日は先生も加えてください。話し合う中で友達と同じ意見も、逆に全く違う意見もあると思いますがそれを心の中にしまい込まないように、つまってもいいから自分の言葉で納得いくまで語って欲しいと思います。それでは資料を見てください。短いですがもう一度最後まで通して読んでおきましょう。ここに出てくる私や周囲の人々を自分と置き換えて考えていってください。

(資料を通読する。)

T : 最初、身障者の人が階段で本を落として困ってたね。拾おうと思うけれども思うように身体が動かないからなかなか拾えない。そんな身障者を見て周りの人達は「手をかすでもなく」中には「珍しそうに歩みをゆるめて振り返り見ながら」通り過ぎていきましたが、そういった行為の背後にどんな気持ちが潜んでいたんだろうか。もし、自分だったらどうしたんだろうか。

中山 : この私は多分同情という気持ちがあったんだと思います。「思わずかけ寄った」とあるけどやっぱり心の中にはかわいそうとか気の毒だという気持ちがあったんだと思います。私は一年生の時からだの不自由な人と何回か交流があって初めは同情ばかりしていたんだけど、先生からそれは差別なんだということを教わって考え方が変わりました。

T : ほな、私以外のかけ寄らなかった人はどうかな。

中山 : やっぱり自分には関係ないからひとごとという感じで通り過ぎていったと思います。

長崎 : 私の心の中にはかわいそうという気持ちがずっとあったのだと思います。かけ寄らなかった人の心の中に身障者に対する差別心があって白い目で見ていたんだと思います。

T : 今、中山さんが言ってくれたように「自分には関係ないことだ、だから無視していた。」それから長崎さんが言ってくれたように「白い目で見る、自分とは全く違う世界の人間であるから。」これは明らかに差別心だね。それから、たとえばかわいそうだなあと思っていても自分がかけよっていくことで周りの人に「あいつは、えーかっこいいじゃ。」と思われたくないという気持ちがあったかも知れんなあ。

それとね、わざわざ振り返って通り過ぎた人達の心の中にはそのほかにもどんな気持ちがあったんだろう。自分だったら身障者を見た時まずどんな感じを受けるかな。

(無回答)

T : だろう、やっぱり興味や関心がわくんじゃないかな。だから そんな気持ちも多分周囲の人達にはあったんだろうね。

その周囲の人達を見ていて私は「思わずかけ寄りました」ね。その時の私はどんな気持ちだったんだろうか。さっき中山さんちょっと言ってくれてたね。

吉田 : 私も初め同情心があってかけ寄ったんだと思うけど、やっぱり同情とは逆にやさしさみたいなものもあって、周りの人が自分たちのことばかり考えたり「あの人は身障者だ」と言った差別心をもって通り過ぎていくのを見て耐え切れなくなったんだと思います。

T : 「同情の気持ちがあった。」「周りの人の身障者に対するそういう差別に耐え切れなくなった。」他にはありませんか。

松本 : 吉田さんとよくにっていて身障者が困っていたので助けようと思ったのだと思います。そしてまた、みんな無視して通っているのに怒ってかけ寄ったのだと思います。しかしその反面心の中には身障者を助けるのは嫌だなあ、気持ち悪いなあと思っていたのだと思います。

竹谷 : この人に誰も手をかしてあげない、そんなこの人がとても悲しそうに見え、またこの人を助けてあげたいという心がこの筆者にはあったと思う。

T : 同情の気持ちという意見が多かったんだけど、身障者にかけ寄ったという私の行為は見るだけで通り過ぎていった人々に比べると表面的には素晴らしいことであるようにも見えるね。でも、そうじゃなくてこれは同情だったということは私のこういった態度から分かりましたか。真に相手を思いやってかけ寄ったわけじゃないということをもみんなは私のどんな行動から判断したのですか。

久米 : 同じ位置で見ていたらその人が「ありがとう」と言葉にならなくても一生懸命言っていることは伝わったと思います。

(後しばらく沈黙)

T : 身障者の人が「ありがとう」という感謝の気持ちを込めて言葉ではうまく言い表せなかったから片手を差し出した時、私は戸惑ってしもうたな。そして、やっとのこと、本当にやっとのことと握手をしたなあ。その時に私が抱いた気持ちというのはどんなものだったんだろう。どうして握手するのを戸惑ってしまったんだろうか

中山 : あめのように曲がりくねった指を見てやっぱり気持ち悪いと思ったから戸惑ったと思います。

二條 : この人と握手したら周りの人から変な目で見られるような気がして戸惑ったんだと思います。

中山 : 私も身体の不自由な人と手をつないだことがあります。この資料に出てきた女の子と同じように戸惑いました。けど、手をつないだ時ほっとしました。私達と同じように温かかったからですこの時同じ手の温もりと同じ赤い血が流れているのだなあと思いほっとしました。

T : 差し出された手の指が異様に曲がっていたから触るのが恐ろしくなったというのは外面的な、全く表面的なことじゃわな。これと人間の価値というのを一緒に考え

判断してしまった。それから、周りの人の目を気にする、体裁を気にする気持ちやね。それ以外にはどうでしょうか。

榊井：この人はなりたくてそうなったわけじゃないと思うけれども、曲がりくねった指を見てしまうと恐ろしくなったんだと思います。

T：理屈では分かっているけど、そういう指を見てしまうと恐ろしかったんやな。

じゃあね、そういう気持ちっていうのは何もせずに通り過ぎた人の気持ちと同じようなものがあるね。行為はその人達より立派だったけれども、気持ちの上では同じようなところがあったね。さあ、果たしてそれでいいんだろうか。

その後私はまた身障者と車内で出合うわけだけどその人は一人の老人に席を譲ってた。それを見て私の気持ちは恐ろしいとか異様な感じから、変わっていったなあ。握手したときの手の温もりは本当にやさしい手の温もりだという風に私の気持ちを変えていったものは何だったんだろうか。みんなはどういう風に思いますか。身障者のそういう行為を見て私の気持ちは変わっていった、それはどうしてだと思えますか。

久次米：最初筆者は外見だけで判断していたので恐ろしく何とも言えない気持ちになったんだと思います。でもその人の行動を見ているうちに気持ちが変わっていったんだと思います。

中山：今までの考え方などが随分間違っていたことや身体の不自由な人に対する差別に無関心だったことが恥ずかしくなったんだと思います。この女の子は身体の不自由な人に人を思いやる気持ちを教えてもらったと思います。人間として一番大切なことを教わったと思います。

竹谷：この筆者は自分の身体にハンディをもっていながら人を思いやるという気持ち、それが分かったと思います。

長崎：自分が今までやってきたことがすごく恥ずかしくなってこの人の姿を見て自分が思いやる心を持たなければいけないということが分かってきたからだと思います。

吉田：老人に席を譲ったこの人の本当のやさしさっちゃんを分かって今まで自分が身障者とかを差別してきたことがすごく悪いように思えてきて、これからは身障者とかに対する差別なんかはできないと思ったんだと思います。

T：最初身障者を見た時恐ろしく思った、異様な何とも言えないような気持ちになった、その時の私の気持ちというのはさっきみんながたくさん言ってくれたね。その時に思っていたことが本当は違うかったと気付いていくんやな。どうだろう、この「私」と同じような体験をした人おらんだろうか。身障者の人と一緒に何かをしたりあるいはまたどこかでかかわったり触れ合ったりしたことはないですか。さっきちょっと中山さんが交流学习のことを言ってくれていたけれども、このクラスにも何人か一年生の時に交流学习に参加した人がいると思いますがその時に初め見た感じと実際に知り合っただけでかかわって感じたことと一緒にあったらどうかな。あるいはその中から学んだことはなかったらどうかな。それをちょっとみんなに言ってあげてください。

(挙手無し)

T：それでは交流学习に参加した人、手をあげてみてください。そしたら何でもかまわないからその時感じたことを言ってみて下さい。

豊田：人間は外見だけでないということを学びました。

T：それはどういったところから？

豊田：一緒に遊んだりしてやさしさとかを学んだ。

茂美：いろいろな行事を通して私が思ったことは障害をもった人のほうが私達より数倍も素晴らしいということです。

T：どんなふうなところでそれを感じた？

茂美：一生懸命話そうとしているところや目の見えない人が歌詞を暗記して歌おうとしていたことからです。

中羽：僕も豊田君とにて外見だけで判断するっちゃうか、外見だけでないと思った。そして、僕も一度や二度でなしに養護学校にいったダンスもしたし一緒に食事もしたしいろいろな行事もしたしその中で友達ができました。そしてその子とあったらよう話もするし、その子を見ていると何か強いなっちゃうイメージがあって自分も負けられないと思います。

和智：障害をもっている人のほうが僕たちより何倍も素晴らしくいきているなぁと思いました。

中山：話しかけるのさえ戸惑っていたけど身体の不自由な子のほうから話しかけてくれてごっつうれしかったです。

T：他にそれ以外のことで障害を持つ人と触れ合ったことのある人はいませんか。

元木：私の家の近くに身障者の子がいるけれど、家族と一緒に車を洗ったり庭で遊んでいるのをよく見かけるんですが、あまり言葉が喋れなくて何を言っているのかよく分からないんだけど一生懸命生きているのすごいなぁと思いました。

T：そうやな。でも皆がそうやって交流学習やあるいはいろんな場面で身障者の人と出合っただけじゃなくて触れ合っただけじゃなく外見じゃないかみの素晴らしさ、人間的な価値や生き方やそんなものはわからなかったよね。見ただけじゃわからなかったよね。かかわって初めて分かったことじゃわな。今皆が話してくれたようなこととこの私というのは同じやと思う。この人の中で最初思ったことと気持ちが変わっていったのは外見じゃないそういう身障者のやさしい、人を思いやる気持ちをその人は行動として表した、そしてそれを見てそれに触れて初めて気が付いたんだ。もしその時にその人に係わらなかつたらあの段階で別れたままだったわな。でも、私は気が付いた。そこに、「その人の後ろ姿にそっと謝りました。」とあるね。私の最初の気持ち、同情でかけ寄ったことや外面に惑わされたことは間違っていたんだということ、自分が愚かだったんだなぁということに気が付いたからだと思います。みんなの中にも触れ合ったとき初めてそういうことに気が付いた人もおるし今まで勉強してきて気が付いた人もいるでしょう。

また、この資料では身障者差別だったけれども他の差別に対しても同じだと思う。身の回りにもいろいろな差別の形があってこれからかかわることがあるかもしれない。ほな、これからどんな取り組みをしていかなあかんのか、自分自身はどんなふうにしていったらいいんだろう。この資料を通してまた今までの学習の中で経験の中で思うことを言ってください。

中山：私が学んだように身障者との交流をもっと深めたらいいと思います。この世の中

には分かっていない人がたくさんいると思う。私もあまり偉そうなことは言えないけど少しは分かっているつもりです。もっともっと勉強していきたいです。

大川：同情を捨てて同じ立場に立って考えていけばいいと思います。

岩瀬：やっぱり中山さんと同じで身障者の人達と触れ合って同じ立場に立って考えていかなければならないと思います。

佐々木：みんな同じ人間として生まれてきたはずだけどほんの少し身体の一部が悪いというので差別するという考え方を改めなければいけないと思います。大きな違いがあるわけでもないはずで同じ人間という意識がないことに腹が立ちます。生まれてきて誇りの持てるような社会にしていかなければいつまで立ってもよいほうには向いていけないと思うから一緒に明るくやっていきたいと思います。

松長：差別を無くすのには身近なところからみんなで少しずつ少しずつ直していけばいいと思います。同情という気持ちがないように人を自分より下に見たりしないように同じ立場で差別解消に取り組んでいけばいいと思う。

犬伏：僕も身障者の人と係わっていったらその人の気持ちとかが分かってその人が困っていたらただ見て通りすぎるようなことはできないと思います。

中山：今私がこういう考えが言えるのも、一年生の時A組のみんなと一緒に交流学习などで障害者差別について勉強してきたからです。もっともっと交流を深めてみんな頑張っていきたいです。

市川：いろんな人と触れ合って自分が逃げないようにしたい。

竹谷：人間それぞれ悪い心はいくらもある。一つもないといえる人は多分いないと思う。だけど差別を心から憎み絶対に差別を許さないという心が心の片隅でなく心全体に広がっていくように努力していきたい。そんな気持ちを大切に、一日一日を楽しく生活していきたい。

長崎：身体障害者の人とかかわってもっといろいろなことを学んで自分の心の中にある差別の心を取り除いて頑張っていかなければならないと思う。

岡田：これからいつどんな差別に合うか分かりません。だから身障者の人に出会ってもこの学習を思い出して同情の気持ちで助けるのでなく本当に心から思えるようになります。

村山：僕はこの学習をしてもし自分が身障者にであつたらやっぱり最初は戸惑うと思うからそれに負けないように頑張っていきたいと思います。ほんとで、差別があるのはみんなほとんどの人が差別に関心なので一緒に学習すれば早く差別がなくなると思います。それと、同情という気持ちも必要だと思います。同情と言っても相手をかわいそうと思うような上下関係のあるものでなくて同じ立場に立って相手の気持ちを受け止める人間らしい生き方です。

T：今皆がこれからの取り組みについていろいろなことを考えてるということが分かりました。最後に村山君が言ってくれた「同情も必要だと思います。それは、相手の立場に立っての同情です。」ということだったけれども、まあ完璧な人間でそうそういないと思う。理屈では分かっているイメージとかそんな物に惑わされて実際には自分の中の美しい心というのを行動で表せないという弱い面、あるいは第一印象で瞬間的に人間の価値を判断してしまう面というのは持つてゐるような気がする

。でもそれを越えていかなければ本当の姿、真実というのは見えてこないんね。皆が身障者の人達と触れ合って本との姿を見たように。そして、本当の姿を見ようとするのは自分の意志ですること。自分の意志がないとできないことだと思います。自分が相手とかかわっていく中で初めてその人と同じ立場に立ててそしてまた、痛みや苦しみを自分のものとして感じられる。そして、「してあげる」という同情じゃなくて「するのが当たり前なんだ」と心から思えるような取り組みが必要だと思う。この身障者差別以外の差別にしてもやっぱり同じと思う。逃げずにぶつかって係わっていく中で自分の差別心に気付くこともあると思う。そして、同じ痛みや痛みを味わうことがあるかもしれん。でもそこから生まれた怒りや憤りというのは、差別解消に向けて自分の行動を支えてくれる力にもなるように思います。私自身も弱い面というのはいくらかあるんです。でも、皆と一緒に考えていく中でもやっぱり真実を見つめて自分という存在を大切に強く本当に燐として生きていきたいなァと思います。皆もいろいろな学習や経験の中からそういう気持ちは持つてると思う。この37人全員の中にそれぞれの思いがあると思う。そういう気持ちを態度で、そしてこれからどんな差別にぶつかってもその気持ちを変えないで闘っていけるぶつかっていけるそういうような確かなものにこれからもして行って欲しい。

一緒に頑張りましょう。

てのひらのぬくもり

夏休みに入ってもないある日、母と大阪の知り合いの家に行く途中のできごとでした。

次の汽車が来るまでまだ少し時間があり、私達はゆっくりホームに通じる階段を上って行きました。ふと前を見ると一人の男の人が階段の途中で落とした本を拾おうとしていました。その両手には松葉づえをもち、右に左に必要以上揺れる体。顔は必死の形相で異様にゆがみ、一目で体が不自由な人と分かりました。その時周りには、割合多くの人達がいそがしげに通り過ぎて行きました。

誰ひとりその人に手をかすでもなく・・・中にはめずらしそうに歩みをゆるめ、ふり返り見ながら通り過ぎる人もいました。私は思わずかけより、散らばった二、三冊の本を拾いあつめました。そして手早くそばに落ちていた風呂敷に包み、男の人に手渡ししました。男の人はたふん「ありがとう」と言いたかったのでしょうか。一生懸命に口を動かしているのですがなかなか言葉になりません。私はなぜか恥ずかしくなり、急いで階段をかけ上がろうとした時その人は松葉づえによりかかりながら片手を私の方に差し出していました。握手を求めているのだろうとすぐに分かりました。

長く、青白く・・・指はあめのように曲がりくねっていました。瞬間、私の胸に、その人に触れるのが恐ろしく、異様な、何とも言えない気持ちがかかけめぐりました。でも、一生懸命手を差し出すその人に悪いような気持ちで、やっとのこと、ほんとうに「やっとの事」という感じでその人と握手をしました。そして後ろも見ずに私の目の前にちたつくあの人の曲がりくねった長い指と顔を振り切る様に、一気に階段をかけ上がりました。

しばらくして、入ってきた普通列車に私達は乗りました。車内は夏休みのせいかこんでいて私は空席を必死に捜しました。そしてやっと母と二人分の空席を見つけ、ほっとした時後ろのほうで何やら「どうぞ、どうぞ」と言う声がしました。振り向いた私の目に先ほどの男の人の姿がうつりました。その人は、一つあいている席を一人の老人に譲っていたのです。本来ならば、あの人がその席を譲ってもらうべき人です。けれどもあの人は普通の人の同じように生きようとして、老人に席を譲っているのです。

あの人は体にハンディをもちながら「人を思いやる」という温かい心を態度で表そうとしているのです。私は深い感動を覚えました。先ほど階段であの人のそばを知らん顔で通り過ぎた幾人かの人達、そして手をかしたものの、男の人の姿に恐怖心さえも感じ、逃げ腰だった私は何と愚かだったろう、と恥ずかしくなりました。あの時、恐る恐る握手をした、あの人の手のぬくもりを。それは今思うと、何とも言えぬやさしい手のぬくもりだったように思います。

やがて列車は走りだしました。汽車の揺れにしたがって、老人に席を譲ったあの人は、体を右に左に揺りながら立っています。自分の行為に誇りをもってさえいるようなあの人の後ろ姿を私は目で追いつけながら、そっと謝りました。

私はこれからの生涯の中であの人の、手のひらのぬくもりを忘れることはないでしょう。そしてどんな人にも「思いやりの心」をもって生きていこうと思いました。私はこの体験を通じて、何が正しいのか、どうすることが人の生き方なのかを知ってもらいたいものだと思ふようになりました。